

## 第3部歴史編第2話

### 百万本のバラのルーツ

先年コーカサスへ旅をした。そこには日本人が過去に置き忘れてきてしまった、素朴な人情味の溢れた世界が日常生活に残っていた。ゆったりした豊かな心地で、信仰の厚い村や町をまわった。

この旅で忘れられないのは、グルジア（現ジョージア）の美人ガイド、キティさんが語った長い物語だ。それはグルジア国民が敬愛する不運な画家にまつわるエピソードであった。

画家の名前はニコ・ピロスマニ（1862年～1918年）、独学で絵を描く修行を積み画家となった。一時もてはやされもしたが、画風が素朴であるがゆえに評価されず、貧しく失意のうちに亡くなった。しかし死後故郷グルジアでは人々から愛され、高い評価を得てグルジア国立美術館に（女優マルガリータ）など彼の作品が何点か展示してあり今では国を代表する画家と慕われている。またグルジアの紙幣にも彼の肖像が使用されている。

すっかり有名になった百万本のバラの詩は、画家ニコ・ピロスマニの悲しいエピソードから生まれた。ある時ピロスマニが住む町に、フランス人のマルガリータという素敵な女優がやってきた。一目ぼれした画家ピロスマニは女優の目を引くため、彼女が泊っているホテルの前の広場を花で埋め尽くした。貧乏な画家であったので、大切な画材を含め何もかも売り払い町中の花を買い集めたのである。女優はピロスマニの気持ちを理解することなく去っていったという寂しく悲しい話である。

キティさんはこの逸話が悲恋の詩となり、百万本のバラの歌となり、ロシアで大ヒットしたと締めくくり口を閉じた。説明を聞いていた一同はおしゃべりを止めしばらく誰もが口を開かなかった。帰国してインターネットで百万本のバラについて調べてみた。以下はその概要である。

「百万本のバラ」の歌は、バルト3国の一つラトビアの歌謡曲「ダーヴァーヤ・マーリニャ」（＝マールが与えた人生）を原曲としている。ラトビアの作曲家が作曲し、ロシアの作詞家が詩を書き、ロシアの大物女性歌手（アーラ・プガチョワ）が歌ってヒットしたのが「百万本のバラ」であり、日本では加藤登紀子が翻訳し自身で歌って大ヒットしている。



アルメニアとの国境近くのバラならぬポピーの大群落

ピロスマニが女優に恋をした美しい古都トビリシは、市内を急流が貫き丘の上には砦がそびえている。貧しい画家はどのあたりに住んでいたのであろうか、彼が花で埋め尽くした小さな広場の光景が目の前に浮かぶ。

ロシアの大物女性歌手（百万本のバラ）は 2022 年 10 月夫の住むイスラヘルへ



丘の上の砦から市内